

J **apanese text**

2018年 秋/冬号 日本語編

Works

白

画・文＝篠田桃紅

p.003

“白”には一切が有

口絵

一期一会の月

写真・文＝遠藤湖舟

p.006

毎日毎時、見える風情が変化する。

夜空の、あるいは青空の、高いところに、低いところに、
意表をついて現れる、マジカルな天体、月。

月の魅力はその変化する姿、飄々と動き回る軌道にある。
そして我々は、太古の昔から“変化”には無条件に反応して
しまう。

人間だけに限らない。

生きとし生けるものはすべからく、変化には敏いものなのだ。
いつもと何かが違う。見知らぬ香りがする。見えるはずの
ものが見えない。

命を守り、生き抜くために、研ぎ澄まされてきた感覚が
月の満ち欠けを天空に頂く、我らの中にも宿っている。

日本語の中には、月を使った言葉が実にたくさんある。
今か今かと月の出るのを立って待ちわびる“立待月”。
雨雲に覆われた暗い夜を表す“雨月”は、
空のどこかにあるはずの月に思いを馳せた言葉だ。
うっすらと雲がかかりほのかに輝く月は“薄月”と呼ばれる。

三日月や半月、満月を風流に言い換えた名称も多く、
日本人がいかにも、月の変化を愛し、ともに暮らしてきたかが
偲ばれる。

春に始まった農作業が暑い夏を越えて、実りの季節を迎える
頃。

秋の満月を日本人はこのほか愛でてきた。

しかし月は変化する。今日の満月は、もう明日には違う形に
なっている。

空の様子も刻々と変わる。雲が出て、雨が降り、星が瞬き、
風が吹く。

そして一日が過ぎ、一月が過ぎ、季節が移り、新しい年が
来る。

二度と同じ空はない。二度と同じ月は見えない。

今宵、あなたの空には、どんな月がかかっているだろうか？

(p.007)

風が強く、打ち寄せる波も荒い。海の香りがまわりつく。そんな浜辺
を見下ろし、月はいつもよりも静かに浮かんでいるように見える。カメラ
を構える私の前で、波は「動」を演じ、月は「静」を演じる。『波 (Waves)』
2017年1月30日午後7時 撮影地：神奈川県葉山町

(p.008)

宇宙に投影された地球の影に月が入り込むのが月食。完全に入るのが
皆既月食。この日の皆既月食は東京でも条件よく見ることができた。多
くの人々は月の明るい部分に注目するが、私は地球の影の中にある部分に
目を向ける。そこには幾分ぼやけた影の境界線と、微妙な色の変化が
ある。『皆既月食 (Total lunar eclipse)』2018年1月31日 撮影地：
東京都世田谷区

午後6時30分 月食が始まる前の満月。

午後9時8分 月が徐々に地球の影に入っていく。

午後9時38分 影の面積が大きくなっていく。

午後10時15分 皆既月食。

午後11時30分 月が地球の影から出ていく。

(p.009)

街の灯りで星が見えにくくなった東京に年に何回か現れる、美しい夕暮れの空。時期よく細い月が配されたりすると、幸せな気分をもたらす景色となる。この風景を見逃してしまったら、素敵な贈り物を受け取り損ねたような気持ちになってしまうことだろう。『^よ遠 (Far)』2008年3月9日 午後6時 撮影：東京

遠藤湖舟 (えんどう・こしゅう)

宇宙、中でも月を愛する写真家。日本国内での写真展活動の他、2017年にはニューヨークで自身初の海外での個展を開催。ロサンゼルス・カウンティ美術館 (LACMA) に2点の作品が収蔵された。2018年9月11日から22日まで、ニューヨークの Onishi Gallery (521 West 26th Street, NY) にて、月をテーマにした個展『Faces of the moon— Always Existing, but Always Changing』を開催予定。写真集などの出版も多数。